巻頭言

往生の作法を模索する

東海学園大学 学長　松原武久

年が明けて傘寿を迎えた。健康で今日を迎えられた事を文字通り「有り難い」と思っている。ところが、昨年は友人、知人の特に親しかった人と悲しい別れをした。死にはしないが慢性病や、重篤な病に苦しんでいる者もいる。本人も周囲も望んでいないが、結果としても老残をさらしている。「あらまほしき死に様とは」と自問自答した去年今年であった。

「願わくは花の下にて春死になんそのきさらぎの望月の頃」これは、旅を住家とした歌人西行の歌。彼のすごいところは願っていただけでなく、行者として訓練していた事である。日常的に足腰を鍛え、毎月一日断食、二日断食と食の自己管理をし、自分の身体の変化をよく知っていた。彼は東河内の弘川寺で死を迎えるのであるが、その時七十二歳、その前年に願いを実現すべく、桜を植える。桜が満開になるのか疑問であるが、とにかく翌年の正月から精進する。五穀を断ち十穀を断ち最後は水を断ち、旧暦二月十五日を迎える。時は満月、桜は満開、条件は整っている。しかし、この日はお釈迦様の涅槃の日、畏れ多いとして一日ずらして十六日に息を引き取っている。本当かなと思わないではないが、願い通りの素晴らしい最期。なんとも見事な往生である。人々が感嘆したのも無理はない。

志賀直哉の名作「城崎にて」は「死」の前の騒動を克明に描いている好短編。斉藤茂吉の「死に給ふ母」の連作は最愛の母の「死」に直面した作者の魂の叫び。城山三郎の「指揮官たちの特攻」は不条理な「死」を前にした若き指揮官

の葛藤を怒りを込めて描いた名作。いずれもしっかりとした死生観に裏打ちされていて読む者の心を打つ。

ところで、我々凡人は「死」にきちっと向き合えない。死が科学的、医学的にもかなりの精度で予測でき、バックキャスティング手法で人生の終焉とそれまでの「下り坂」をどう過ごすかの行程表は作れる筈であるが、実際には作らない。「死」と真剣に向き合えないからであろう。

戦前派、戦中派に属する人たちは人生の中断や死に直面せざるを得ない時代に生き、嫌でも「死」を考えさせられたけれど、今は学習指導要領で「生きる力」が強調される世の中。医学的には生かされる。結果として老残は避けて通れない現実となった。あせるけれど、どうしようもない。

凡愚の私、往生の作法を模索する意欲をお与え下さいとただ祈るだけである。